

## 瑞祥（ずいしょう）のかたち

皇居三の丸尚蔵館（皇居東御苑） 25.01.04～03.02

新しい年の到来を喜び、人生の節目に幸福を願う気持ちは、古くから様々造形にたくされてきた。中でも、古代中国において不老不死の仙人が棲むと考えられた「蓬萊山」は、日本では「吉祥図」として描かれ、長寿を象徴する「鶴」と「亀」が添えられた島台などの縁起物としても表された。やがて理想郷としての「蓬萊山」への憧れは、霊峰「富士山」の姿に重ねられていく。

「皇居三の丸美術館」は、皇室に伝わる「絵画」「工芸」「書跡」を収蔵していて、本展は、そのコレクションの中から「鳳凰、松、鶴、富士山、蓬萊山」など縁起の良いモチーフを表した「伊藤若冲」から「横山大観」までの日本美術の名品である絵画・工芸品を一挙に公開している。「鳳凰」は、優れた天子が世に現れる兆しとして、古代中国で尊ばれた伝説の鳥で、日本では古来、高貴さを象徴する鳥として絵画や工芸に表されてきた。

伊藤若冲 《旭日（きょくじつ）鳳凰図》 1755年 一幅 絹本着色 左図

細緻を極めた鳳凰の羽根は美しく、触手のように伸び、からまりあい、不思議な穴まで作る。生き物のような波も、洋式化された波型を画伯の感性によって増幅した成果と思われる「新意の法度（ほっと）の中に出す」という作品である。

伊藤若冲 《老松（ろうしょう）白鳳図》 1765年頃 動植綵図 絹本着色 中図

雄の鳳凰だけが白い羽根で表情も根の造形もなまめかしく、女性の服装と化粧した男性のような白鳳と彼を見つめる山鳩は、画伯の欲望を映すようである。

横山大観 《日出処日本》 1940年 右図

1940（昭和15）年の2600年の奉祝展に出品された作品は、幅約4.5mという破格の大作で、戦時下の画伯は国民感情を絵画に表すことを最優先とした。

大観のことばとして、「私は富士山が好きです。あの山容がとてもきです。春夏秋冬によって山容が違います。眺める場所や朝昼夜で夫々特徴がある。」

